

平成17年度卒業論文

お得な自殺

所属ゼミ	村澤ゼミ
学籍番号	1013020436
氏名	高島裕紀

大阪府立大学経済学部

要約

自殺には縊首・ガス・薬物・飛び降り・入水など様々な手段がある。各手段は、①苦痛の大小・②遺体の醜美・③他人に及ぼす迷惑・④決行にかかる手間・⑤致死率の5つの点で、それぞれ異なる特徴があるが、自殺死亡統計によると選択される自殺手段は、縊首が圧倒的に多い。したがって最もお得な自殺手段は縊首と考えられる。しかし年齢・性別・生活様式など、人間のタイプによって、実際に選ばれる自殺手段には偏りがある。例えば、中年の男性で高い割合を示すのはガス自殺である。これは、ガス自殺の大半が車の排気ガスによるもので、自動車の保有率の高さが自殺決行コストを下げているためである。

本論文では「人間は自殺をする時、結局は一番面倒臭くない方法で自殺する」というメッセージを訴えている。それを説明するために、まず各自殺手段の特徴を、上記の5つの要素で考察する。そして個人の属性や、置かれている環境によって、自殺手段に違いが生まれる疑問を解いていく。その結果、自殺場所の探索コスト・自殺必要品の調達コストなど、決行にかかる手間が自殺手段の選択に最も影響を与えていることを明らかにする。

目次

第1章	はじめに	4
第2章	手段別自殺死亡率の特徴	5
第3章	自殺手段の比較	7
1.	自殺手段の決定要因	7
2.	各自殺手段の特徴	8
(1)	クスリ	8
(2)	首吊り	8
(3)	飛び降り	9
(4)	自傷	10
(5)	ガス	10
(6)	入水	11
(7)	焼身	12
(8)	感電	12
第4章	自殺死亡統計の分析	13
1.	都市部と地方の手段別自殺率の比較	13
2.	職業別・手段別自殺死亡率	14
3.	内陸と臨海の溺死率	16
第5章	性・年齢別における自殺手段構成に偏りが生まれる原因	17
第6章	おわりに	18
参考文献		

第1章 はじめに

自殺には縊首・ガス・薬物・飛び降り・入水など様々な手段がある。各手段は、①苦痛の大小・②遺体の醜美・③他人に及ぼす迷惑・④決行にかかる手間・⑤致死率の5つの点で、それぞれ異なる特徴があるが、自殺死亡統計によると選択される自殺手段は、縊首が圧倒的に多い。したがって最もお得な自殺手段は縊首と考えられる。しかし年齢や性別・生活様式など、人間のタイプによって、実際に選ばれる自殺手段には偏りがある。例えば、中年の男性で高い割合を示すのはガス自殺である。これは、ガス自殺の大半が車の排気ガスによるもので、自動車の保有率の高さが自殺決行コストを下げているためである。

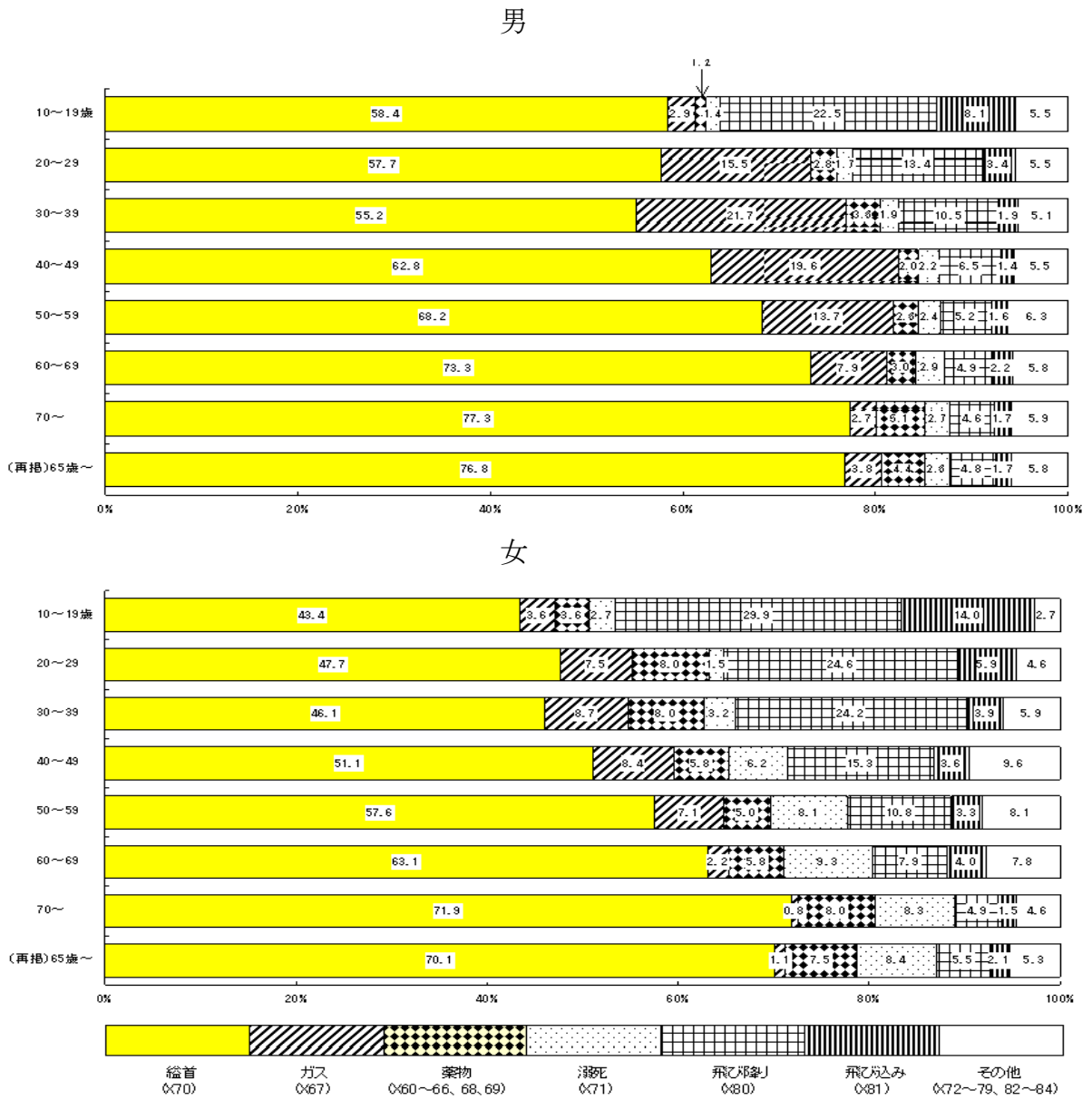
本論文では「人間は自殺をする時、結局は一番面倒臭くない方法で自殺する。」というメッセージを訴えている。それを説明するために、まず各自殺手段の特徴を、上記の5つの要素で考察する。そして個人の属性や、置かれている環境によって、自殺手段に違いが生まれる疑問を解いていく。その結果、自殺場所の探索コスト・自殺必要品の調達コストなど、決行にかかる手間が自殺手段の選択に最も影響を与えていることを明らかにする。

また本論文の構成は以下の通りである。第2章では、手段別自殺死亡率に見られるいくつかの特徴をあげる。第3章では、各自殺手段の特色を5つの要素で比較する。第4章では、いくつかの自殺死亡統計をもとに、自殺手段の選択にどのような背景があるのかを説明し、第5章では、手段別自殺死亡率に見られる特徴が、なぜ生まれるのかをまとめる。そして第6章では、本論文のメッセージの確実性をより高めるためにすべき、今後の課題について述べている。

第2章 手段別自殺死亡率の特徴

ここでは、性・年齢によって自殺手段に偏りが生まれていることを見ていく。図2-1は性・年齢別に見た、自殺手段の構成比較である。

図2-1 性・年齢別による手段別自殺死亡数構成割合(2003)



2003年における手段別の自殺死亡数の割合を性・年齢階級別にみると、その特徴として以下の点が挙げられる。

- ① 男女ともすべての年齢階級で「縊首」による割合が最も多く、高齢になるほどその割合が高くなる。
- ② 中年の男性は「ガス」の割合が高い。
- ③ 若い年齢で特に女性は「飛び降り」の割合が高い。
- ④ 高年の女性は「溺死」の割合が高い。

以上のような特徴が生まれるか原因を探るために、以下の章で各自殺手段の特色を考察し、自殺手段の選択にどのような背景があるのかを、自殺死亡統計をもとに説明していく。

第3章 自殺手段の比較

ここでは具体的に各自殺方法について考察し、その手段のメリット・デメリット、特徴、注意事項などを述べていく。最初にそれらの要素を簡単に整理した表も載せているので併せて参照していただきたい。また第3章は、雨宮（2002）・鶴見（1998）を参考にまとめている。

1. 自殺手段の決定要因

以下の表は各手段を、自殺決行時に受ける苦痛・自殺決行後の遺体の醜美・自殺決行後に他人に及ぼす迷惑・自殺決行にかかる手間・自殺決行後の致死率の5つの要素で考察したものである。表中の◎、○、△、×は各要素の優劣の程度を示している。

表3-1 5つの要素別における各手段の評価

	苦痛	遺体	迷惑	手間	致死率	総合評価
クスリ	×	△	○	×	×	×
首吊り	◎	△	○	◎	◎	◎
飛び降り	◎	×	△	◎	◎	○
自傷	×	△	×	×	×	×
ガス	◎	◎	◎	△	◎	◎
入水	×	×	×	△	×	×
感電	◎	◎	△	×	×	△

2. 各自殺手段の特徴

ここではより詳しく、各自殺手段について見ていくが、それぞれの特徴的な部分を取り上げている。各自殺手段の特色を理解していただきたい。

(1) クスリ

薬物自殺は、睡眠薬を大量に飲み苦しむことなく、綺麗なままで眠るように死ねるというイメージがあるが、実際は全く違う。

薬物自殺の大半は農薬による死亡である。一般に販売されている鎮痛薬や睡眠薬などは成分量が致死量には遠く及ばないものがほとんどであり、数100錠飲んでも死なないように配合されている。

しかも注意しなければならないのは致死量が非常に曖昧であり個人差によるところが大きいことである。眠りながら死ぬという状態には程遠く、嘔吐、全身麻痺を繰り返しながら、内蔵出血、脱水症状、呼吸困難などを引き起こし、胃洗浄の苦痛を味わったあげく結局未遂に終わるのが大半である。

クスリの入手コスト、摂取の手間、致死率の低さ、未遂の苦痛などを考えると薬物自殺は賢明な手段ではないと言える。

(2) 首吊り

首吊りはいつの時代にも人気ナンバー1である。2003年の首吊り自殺率は男性76.8%、女性70.1%と他の手段を大きく引き離している。

首吊りの長所は致死率の高さと手軽さである。室内で簡単に実行できるのも優れた特徴である。致死率はほぼ100%で、手間も紐

を用意することとそれを支える柱などを探すだけでいい。

首吊りは首を絞めるのと違い窒息死ではなく、脳にいく血液が遮断され脳内が酸欠状態になり意識を失う。法医学の研究によると首を吊るとすぐに意識が遠のき、手も足も自由に動かさず、しかもこの過程で全く苦痛はないことが常識的に明らかになっている。柔道の絞め技で落とされた状態がこれにあたる。

首吊り自殺に関して気になるのは死体の見た目であろう。これについては、発見の早さと実行する本人の事前準備が大きく関係するようである。発見時に綺麗な状態でいたければ前もって排泄行為を済ませ、早めに発見されるような環境作りや事前連絡をすれば問題ない。

以上のことを考えると、首吊り自殺は圧倒的に優れた自殺手段である。必要なものがロープとそれをくくる場所があればいいだけで手間がかからず、環境を選ばない。致死率も高く老若男女に決行可能な方法である。

(3) 飛び降り

飛び降り自殺は首吊りに次いで人気の高い自殺だ。2003年の順位を見ても男性、女性ともに首吊りの次に飛び降り自殺がきており、特に若い女性に人気である。

飛び降りには他の自殺手段につきまとう暗いイメージがないことと、今この瞬間に自殺を望む人にとってこれほど魅力的な手段はないことが最大の特徴である。一歩踏み出すだけでありとあらゆる問題にけりをつけることができる。

飛び降り自殺は痛みも不安も恐怖もない。それどころかむしろ気持ちいい。未遂者の体験談を総合するとそのような結論が出てくる。

ただ欠点もいくつかある。それは未遂率が意外と高いことであり、他の方法と比べ遺体の損傷は激しい。そして落下時に他の人との巻

き込み事故を起こし多額の損害賠償を遺族、未遂の場合は本人が負う可能性がある。

以上のことを総合すると、全く苦痛はなく、注意事項は十分な高さで落下地点の状態、最低限下に人やモノがないことを確認しさえすればよいので遺体の損傷が多少あることを差し引いても優れた自殺手段と言える。

(4) 自傷

自傷という手段は自殺に向かない。手首を切るリストカット、首の頸動脈切り、割腹と全てにおいて未遂率が非常に高い。自傷の中でもリストカットにおいては死ぬためではなく、切るために切る、生きるために切る人が多く、もはや趣味となってしまうて、手首の傷が自らのアイデンティティになっている人もいるのが特徴的である。

手首の動脈・頸動脈はいずれも的確に切断することは難しく、血液も固まってしまい死に至る確率は低い。割腹の場合も腹膜ショックをおこし、普通は痛くてそれ以上切れない。わざわざ割腹を手段に選ぶには何らかのメッセージ性を持っているのだろうが、相当の覚悟と意志がなければ目的を達成することはできない。

このように自傷は用意するものといえれば刃物ひとつだが、激しい苦痛を強いられる上に肝心の致死率も低いことを考慮すると良い手段とはいえない。

(5) ガス

ガス自殺は中年の男性に多い。ガス自殺はほとんどが自動車の排ガスを引き込む方法で、自動車の保有率が背景にある。

都市ガスが一酸化炭素を含まない天然ガスに変わって室内では死ねなくなった。しかし地方ではまだプロパンガスを使用しているところが多く、部屋にガスを充満させて自殺することはできる。確かにプロパンガスは空気よりも重く床下に溜まり、横になって寝れば酸素欠乏状態になって死に至る。だがこの方法ではガス中毒ではなく窒息死なので非常に苦しい。しかも一步間違えれば大爆発をまねき、飛び降り自殺の巻き込み事故同様に、多額の賠償責任を負う可能性がある。

それとは別に自動車の排気ガスによる方法が一般的であり、車の所有率の高い男性に人気の原因でもある。車内の一酸化炭素濃度が高まり、吸入時間が長くなるにつれて、めまいや頭痛をきたし、動悸が激しくなり、やがて意識を失ったのち呼吸停止により死に至る。苦痛は少なく30分～1時間で意識を失う。遺体は外傷もなく非常に美しい。

以上のことから密室によるガス自殺はリスク、デメリットが大きい、自動車によるものなら非常に優れた自殺手段といえる。

(6) 入水

入水自殺は大掛かりな捜索活動が行われ、莫大なコストがかかる可能性がある。またカナヅチやお年寄りぐらいにしか有効とは言えず、実際に20～30代の男性の入水自殺は極端に少ない。意を決して飛び込んだものの、苦しみもがくためどうしても泳いでしまい、未遂率が高くなる。

また水死体は土左衛門と呼ばれ、一般に見た目も非常に悪い。

以上のことを考えると未遂率の高さや苦痛、経済的コスト、遺体の醜さどれをとっても自殺にはかなり不向きな手段と言える。

(7) 焼身

焼身自殺は非常に苦痛を伴う。皮膚を100%火傷しても即死できず、病院に運ばれ半日程度もがいた後事切れる場合も多い。死に切れなかった時の後遺症は他の手段とは比較にならないほど悲惨である。ごく普通に自殺したい人には絶対に向かない。

ただし世間に何かを訴えたいために死ぬのなら焼身自殺ほど影響力の強いものはない。焼身自殺は常に政治や宗教と隣りあわせである。命を懸けるにふさわしいイデオロギーや宗教観を持っている人には無関係かもしれないが、火災事故を招く可能性は十分あり、この場合も損害賠償の経済的リスクの恐れがある。

やはり焼身自殺は一般的に優れた手段ではない。

(8) 感電

感電自殺は事例も100人前後を推移し、手段別の統計にもその他で分類されており、不確定な部分が多い。しかも不思議なことにその内訳は男性が90%以上を占めており、ほとんど男性だけが使っている自殺手段である。

しかし意外なことに感電自殺による死は、一瞬の呼吸停止、心停止、ショックなどによるもので苦痛はまさに一瞬で楽な自殺の一つである。遺体の外傷も少ない。

ただ電気系統の知識が豊富であることが必須であり、未遂に終わる可能性が高いこと、不確実性の高さがつきまとうのが難点である。

第4章 自殺死亡統計の分析

ここでは自殺死亡統計に見られる特徴に、どのような背景があるのかを考察していく。そこで自殺手段の選択が、個人の属性や置かれている環境のもとで、決行の手間がかからないという要素に、最も反映されていることを検証する。

1. 都市部と地方の手段別自殺率の比較

表4-1 都市部と地方の手段別自殺率（2003）

	縊首	ガス	薬物	溺死	飛び降り	飛び込み
男（%）						
14大都市	63.6	10.0	2.2	2.6	12.6	3.0
市部	65.9	14.3	2.9	2.3	6.8	2.0
郡部	70.1	14.9	3.9	2.1	2.8	0.8
女（%）						
14大都市	52.7	3.6	5.5	5.0	23.4	4.3
市部	58.5	5.5	6.3	6.9	12.0	4.0
郡部	65.3	4.5	8.6	7.5	5.5	2.1

出所 厚生労働省（2005）

表4-1から見られるように縊首・ガス・薬物が地方になればその割合を高くし、飛び降り・飛び込みは都市部の方が高くなる傾向がある。この傾向が現れるのは、以下の背景があるためである。

- ① 地方の方がガス自殺の割合が高くなるのは、都市部より比較的車の所有率が高いためである。ガス自殺が、車の所有率に強く影響されていることがこのことから分かる。

- ② 薬物自殺も地方の方が割合が高いのは、薬物自殺の大半が農薬によるもので、地方ほど農薬が入手しやすいためである。
- ③ 飛び降り自殺は、都市部と地方の差が最も顕著に現れている。これは都市部ほど高層建築物の数が増えるためである。
- ④ 飛び込み自殺も同様に、路線の数・利用頻度が多いため、都市部ほど割合がたかくなっている。
- ⑤ 縊首の割合が高く地域差があまりないのは、環境を選ばず決行可能な手段だからである。

高層建築物の数、農薬入手の手間、路線の数・利用頻度、車の保有率などの特色が影響し、自殺手段は生活環境に大きく反映する。いずれも自殺決行に対して、自殺場所の探索コスト、必要品の入手の手間に起因している。

2. 職業別・手段別自殺死亡率

表 4 - 2 職業別・手段別自殺死亡率（2003）

	縊首	ガス	薬物	溺死	飛び降り	飛び込み
男 (%)						
専門的・技術的職業従事者	75.7	6.1	3.4	2.0	6.6	0.7
管理的職業従事者	77.2	6.1	3.0	1.2	5.2	1.3
事務従事者	67.3	7.4	2.5	3.0	11.1	2.5
販売従事者	72.2	8.5	2.5	1.6	7.1	0.9
サービス職業従事者	73.9	8.1	3.0	1.7	6.2	1.4
保安職業従事者	73.5	5.2	1.3	1.3	7.0	2.6
農林漁業作業員	75.3	4.6	12.3	1.7	1.8	—
運輸・通信従事者	68.3	14.7	2.0	2.9	6.0	1.2
生産工程・労務作業員	73.0	9.4	3.6	2.1	5.2	1.0

	縊首	ガス	薬物	溺死	飛び降り	飛び込み
女 (%)						
専門的・技術的職業従事者	52.6	2.0	7.7	4.5	22.7	4.0
管理的職業従事者	56.3	3.1	10.9	7.8	12.5	3.1
事務従事者	57.2	2.6	6.6	5.9	18.8	3.7
販売従事者	62.3	5.2	6.1	6.1	11.3	1.9
サービス職業従事者	67.2	3.3	5.3	7.0	11.6	1.7
保安職業従事者	81.8	—	9.1	—	9.1	—
農林漁業作業者	66.2	0.4	21.5	4.2	1.3	1.3
運輸・通信従事者	66.7	10.0	3.3	3.3	6.7	3.3
生産工程・労務作業者	65.9	5.5	7.7	3.8	8.8	1.1

出所 厚生労働省（2005）

図4-2に見られる統計の特徴とその背景は以下の通りである。

- ① 縊首自殺率は幅広く高い。どのような職種においても決行が容易で、優れた手段であることが分かる。
- ② 運輸・通信従事者はガス自殺率が高い。車を扱う職種であることが影響している。
- ③ 農林漁業作業者は薬物自殺率が高く飛び降り自殺率が低い。これも薬物が手に入りやすく、高層建築物のない環境での職種であることが原因である。
- ④ 第3次産業は飛び降り自殺率が高い。高層建築物のオフィスという職場環境の影響がある。

職場環境によっても自殺決行コストが低いものを選択していることが理解できる。

3. 内陸と臨海の溺死率

表 4 - 3 内陸と臨海の溺死率 (2003)

	溺死率%
内陸の県	1.6
その他の都道府県	2.4

注 内陸の県は栃木、群馬、埼玉、山梨、長野、岐阜、滋賀、奈良
出所 厚生労働省 (2005)

内陸より海に面した地域の方が溺死率が高い。ただ滋賀県に関しては琵琶湖があるためか溺死率が2.9%と高くなっている。溺死に関しても、置かれている環境に自殺手段の選択が反映されている。自殺場所の探索コストの低さが影響しているわけである。

第5章 性・年齢別における自殺手段構成に偏りが生まれる原因

第3・4章から、個人の属性や、置かれている環境によって、自殺手段に違いが生まれ、自殺手段の選択が、自殺場所の探索コスト・自殺必要品の調達コストなど、決行にかかる手間に最も影響を受けていることが明らかになった。

ここで第2章の、性・年齢別における自殺手段構成に見られた4つの特徴が、どのようなことに起因しているかをまとめる。

- ① 男女ともすべての年齢階級で「縊首」による割合が最も多く、高齢になるほどその割合が高くなる。
- ② 中年の男性は「ガス」の割合が高い。
- ③ 若い年齢で特に女性は「飛び降り」の割合が高い。
- ④ 高年の女性は「溺死」の割合が高い。

①については、縊首が、属性や環境に左右されない最も優れた手段であり、高齢者にとって決行が容易であるためである。

②については、ガス自殺の大半が車の排気ガスによるもので、自動車の保有率の高さが自殺決行コストを下げているためである。

そして③④については、飛び降りと溺死が自殺場所の探索コストに関係していることは説明できた。しかし、なぜそれらが若い女性と高齢の女性に、それぞれ選択されるのかは解明できなかった。

③④の解明には、性・年齢における手段別自殺率の、地域ごとの詳細なデータが必要だが、厚生省（2005）には記載されていなかった。

第6章 おわりに

世の中には様々な人間がいるのと同様に、自殺の仕方にもいろいろな方法があり、

自殺の決行に臨む時、どのような方法が自分にとって良いのかを考えるのは自然なことであろう。だから何に重きを置き、どの自殺手段を選ぶかは個人の自由であって、本来十人十色になるように最初は考えていた。しかし実際は年齢や性別・生活環境などによって、実際に選ばれる自殺手段には偏りがあった。

各自殺手段の特徴を、苦痛の大小・遺体の醜美・他人に及ぼす迷惑・決行にかかる手間・致死率の5つの要素で考察し、個人の属性や、置かれている環境によって、自殺手段に違いが生まれる疑問を解いていく上で、自殺手段の選択が、自殺場所の探索コスト・自殺必要品の調達コストなど、決行にかかる手間に最も影響を受けていることが明らかになった。人間は自殺をする時、結局は一番面倒臭くない方法で自殺するのである。

ただ本論文では、若い年齢で特に女性は飛び降り、高年の女性は溺死の割合が高くなる原因は分からなかった。今後の課題としては、個人の属性と手段選択の因果関係を明らかにするため、地域ごとの詳細なデータの分析や、各国との統計の比較などによって、よりメッセージの確実性を高めていきたい。

最後に蛇足をひとつ。かつて藤村操という青年が華巖の滝から投身自殺した。彼は以下のような言葉を遺し、自殺にそれまでにない高尚で哲学的なイメージを与えた。「万有の真相は唯一言にしてつくす。曰く『不可解』」秋本（1986）。彼はこの世の中の真理が不可解であるとし、自ら命を絶った。彼の言動の半分は賛成する。この世の中の真理は不可解であろう。だから私は生きていく。

参考文献

秋本國男（1986）「自殺考」東尚社会保険企画

雨宮処凜（2002）「自殺のコスト」太田出版

厚生労働省（2005）「第5回自殺死亡統計」

鶴見済（1998）「完全自殺マニュアル」太田出版